

すべての作物にとって“たね（種）”の品質は重要である。特に栄養繁殖するバレイショでは、種芋の優劣がその作柄を支配するので、種バレイショの重要性は非常に大きい。そのため国は、長年にわたり莫大な人と経費を投入して原原種農場を営営し、優良種バレイショの確保に努力して来た。

しかし戦後も60年。その間の科学の進歩は目を見張るものがある。特に成長点培養法の進歩があり、わが国でも1966年にバレイショのウイルスフリー化に成功し、バレイショの最重要病害「ウイルス病」が除去され、生産力が大きく向上した。さらにウイルスフリー苗を“節分割”して増殖する「ノードルカット nodal cutting」の発達、また密閉容器中での回転培養によるマイクロチューバーの作成と隔離温室でのミニチューバー養成法などの開発は、無病種バレイショの急速増殖を可能にしている。そして現在では私企業がこれらの技術を武器に種芋産業参入の機会を窺っているのは周知の事実である。

筆者は20年近く前に、米国で某大学養成の無病種バレイショを出発点に、自家増殖で種芋を生産し販売している企業を見た。その企業は、ノードルカット法で増殖した苗を隔離栽培後に逐次圃場栽培し、低コスト生産した無病種バレイショを州の検査後に種芋として販売した。また著者の(株)カルビーポテト在職中、アメリカのPGI社から上記と同種の種バレイショ増殖技術を導入

し（1987年）、日本国内において実験を試みた。その結果、1㎡当り1kgの無病種芋を生産するに至った。しかし、植物防疫法等の規制があり、実用化は出来なかった。また、最近の見聞であるが、北海道の農家試験では、企業養成のマイクロチューバーを購入し、無病的に3世代増殖した結果、市販の種芋に匹敵する価格と品質が実現したようである。

このような背景を考えると、現在のこのような「原原種農場」を頂点とする単一の流れだけでなく、色々な流れの採種組織を検討すべき時期に来ていると考えられる。その新しい採種体系の有るべき姿については、最大の種バレイショ生産国であるオランダや米国等の事例が参考になろう。米国では種芋生産農家等がマイクロチューバーを出発点に無病種芋を生産し、それを州機関が検査かつ結果を公開し、栽培農家はその公開情報を参考に希望の価格や品質の種芋を入手するシステム下にある。この米国におけるような種芋供給体系の構築には、基本植物の供給体制、品質保証の責任体制など検討すべき課題は山積している。アジア地域への種芋輸出など将来の展望を実現するためにも、新しい採種体系が実現するよう早期の検討を期待したい。

* Chishiki, Takamichi

1927年生 農水省、長崎県でサツマイモとバレイショの育種研究 1983～97年(株)カルビーポテト常務取締役 デジマ、ニシユタカなどを育成